

# 木沢村の社寺建築

社寺建築班（郷土建築研究会）

板東 知子<sup>\*1</sup> 大坂 公吉<sup>\*2</sup> 黒崎 仁資<sup>\*3</sup> 後藤田佳男<sup>\*4</sup> 酒井 勇治<sup>\*5</sup> 坂口 敏司<sup>\*6</sup>  
 谷田 望<sup>\*7</sup> 富田 眞二<sup>\*8</sup> 中野 眞弘<sup>\*9</sup> 宮田 千鶴<sup>\*10</sup> 村上 香奈<sup>\*7</sup> 森兼 三郎<sup>\*11</sup>  
 龍野 文男<sup>\*12</sup>

## 1. はじめに

木沢村は徳島県の南西部、那賀川の上流に位置し、西は剣山を背にして東祖谷山村、北は木屋平村及び神山町、南は木頭村及び上那賀町、東は上勝町、六つの町村に隣接する山間の村である。村の中央には坂州木頭川が東西に流れ、那賀川に注いでいる。

私たち社寺建築班は、10月8日から村内に入り、社寺建築を建築学的見地から調査した。神社は20カ所、寺院、お堂は9カ寺を調査し、案内図（後掲の図6）を作成し、それぞれの建立年代や構造、建築様式などを一覧表（表1・2）にまとめた。そのうち神社2カ所、寺院1カ所、お堂1カ所については

詳細調査を行い、実測図を作成した。

また、9カ所の社寺から73枚の棟札<sup>むなふだ</sup>を発見し、その寸法、年代、大工名等の内容を調査することができ、建立年代等の確定に大きな成果を得た。

## 2. 木沢村の社寺建築概要

### 1) 神社建築の概要

神社は20社を調査した。その建築年代については、書籍や棟札から確認できるもの以外は、建築様式から推測することとする。

村内で最も古いものは、坂州の八幡神社本殿<sup>はちまん</sup>（図1）で、棟札より江戸末期の弘化3年（1846年）の再建であることが確認できた。その他に江戸末期の



図1 八幡神社（坂州）本殿



図2 宇奈為神社本殿

\*1 徳島県住宅課 \*2 大坂工務店 \*3 黒崎建設 \*4 徳島市安宅町 \*5 徳島市東新町 \*6 坂口建築設計室 \*7 徳島大学大学院 \*8 富田建築設計室 \*9 真建築都市研究室 \*10 徳島大学工学部 \*11 A+U森兼設計室 \*12 龍野建築設計事務所

ものとしては、木頭の宇奈為神社本殿（図2）があり、棟札によると安政3年（1857年）に再建されている。また宇奈為神社境内にある熊野本宮、熊野新宮、熊野那智宮、八社宮も同じく安政3年（1857年）の再建である。これら坂州の八幡神社本殿、木頭の宇奈為神社本殿ほか4宮は、県南那賀、海部両郡内の社寺を多く手がけている地元の宮大工湯浅岩蔵によって再建されたものであることが棟札からも確認できた。

またこれらの建物は、虹梁や肘木の彫り物が簡素である反面、向拝の中備彫刻や木鼻、身舎の妻飾には表現豊かで派手な彫刻が施されており、彼の巧みな技が見て取れる。（図3）その他の神社は様式から推測する限り明治以降に建立されたものと考えられる。

木沢村の神社建築の様式は、神明造りが出羽の倭武神社本殿で、その他はすべて流造りであり、見世棚造りの小社殿も見られた。流造りとは切妻、平入の本殿正面の屋根を伸ばして向拝としたもので、県下において圧倒的に多い様式である。規模は



図3 向拝の中備彫刻 八幡神社（坂州）



図4 八方向に延びる組物 八幡神社（掛盤）

柱間の数で表し、木頭の宇奈為神社境内の八社宮と川成の八幡神社本殿が二間社、その他はすべて一間社で、三間社流造りは見られなかった。

那賀川流域の社殿建築の特徴として軒裏の手先を四方八方に出す組物（図4）があるが、この組物は、前述の湯浅岩蔵の系統のものに多く見られるものである。木沢村においても彼の技巧により建てられた宇奈為神社の熊野本宮と掛盤の八幡神社で確認できた。

## 2) 寺院建築の概要

寺院は1カ寺、お堂は8カ所を調査した。

村内の寺院は黒滝寺ただ一つであり、延暦12年（793年）弘法大師による開基と伝えられており、四国霊場二十一番札所太龍寺の奥の院である。現在の黒滝寺本堂は『木沢村誌』（1976）によると江戸中期、享保元年（1716年）に再建されている。

お堂は、出羽の阿弥陀堂（図5）が最も古く江戸後期、棟札より安永2年（1773年）に再建されていることが確認できた。また木頭の長福寺（木頭の庵）と木頭名の虚空蔵堂も木鼻や肘木の彫り物などの様式から判断する限り、この時期の再建であることが推測されるが、今回の調査では建築年代の確定には至らなかった。

木沢村の社寺建築の特徴は、神社境内に農村舞台が現存していることである。昭和49年に県の文化財に指定され、後に平成10年に国指定重要有形民俗文化財となった坂州農村舞台をはじめ今回の調査でも15カ所の神社で農村舞台が確認できた。また、隣接してお堂が建てられている所が3カ所あった。これも木沢村の社寺建築の特徴の一つである。

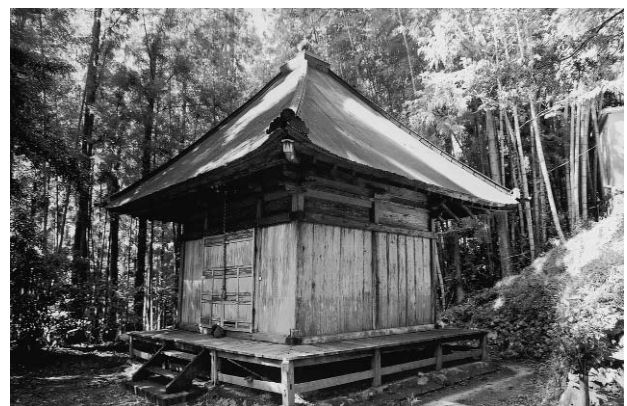


図5 出羽の阿弥陀堂

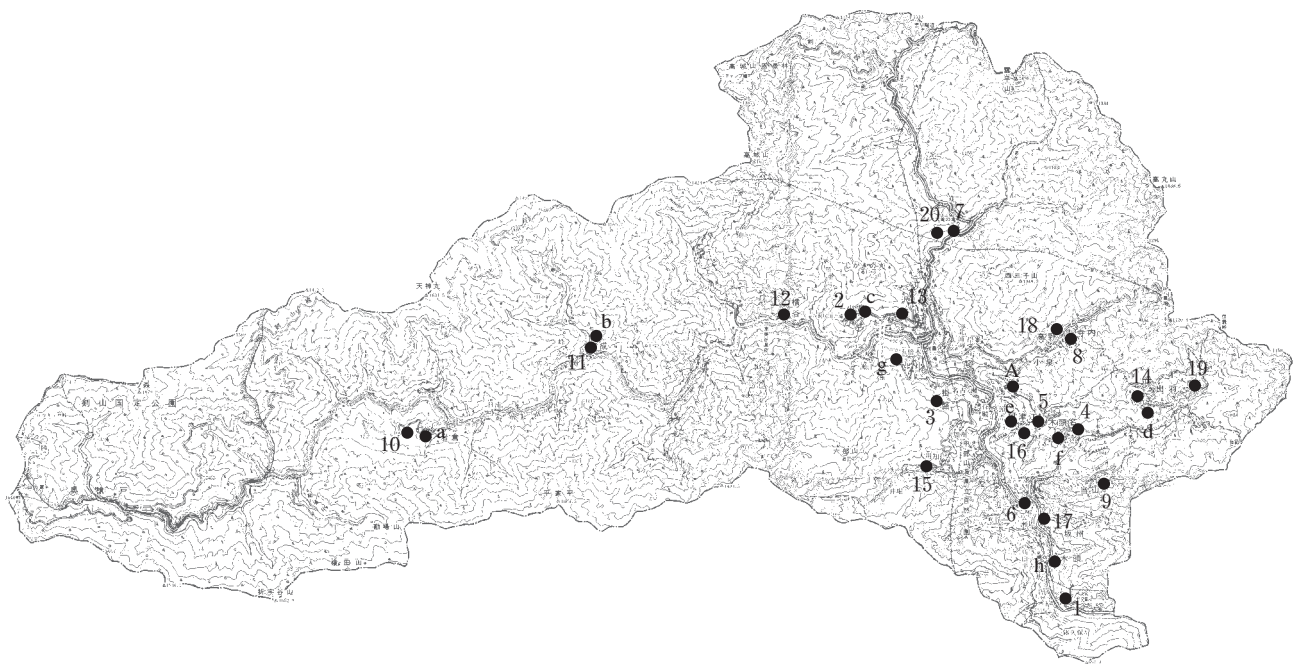
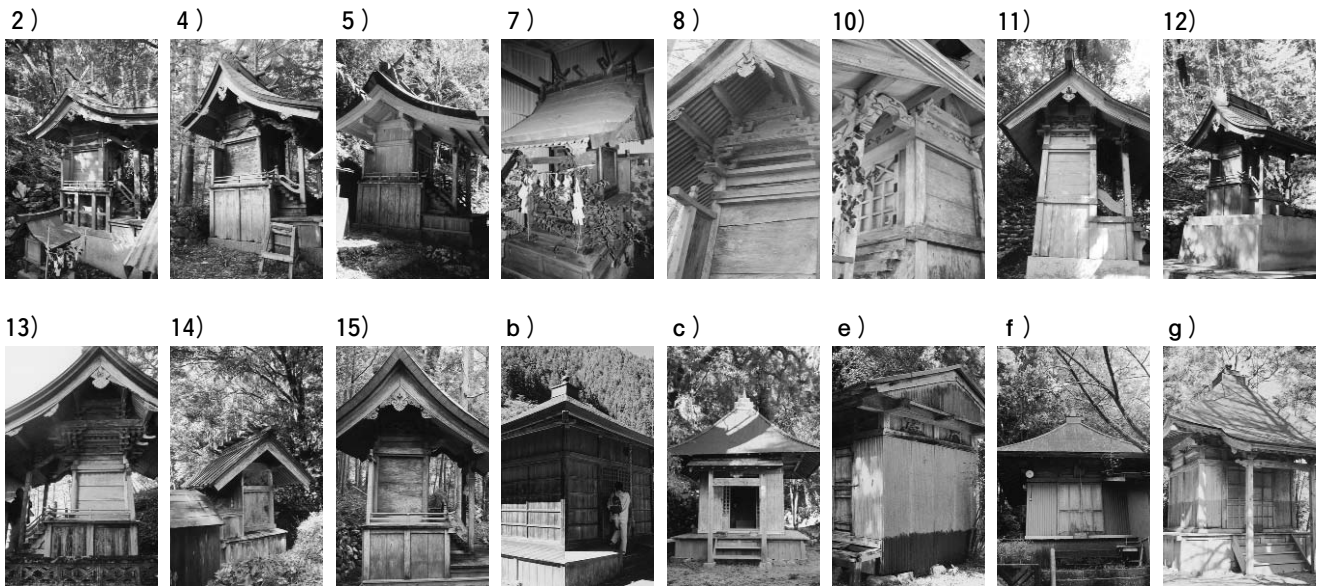


図6 木沢村の社寺建築案内図

- |                |                |               |               |
|----------------|----------------|---------------|---------------|
| 1. 宇奈為神社       | 10. 八幡神社 (岩倉)  | 19. 天神社 (栩平)  | g. 観音堂 (五倍木)  |
| 2. 八幡神社 (小島)   | 11. 稲荷神社 (川成)  | 20. 雲早神社      | h. 長福寺 (木頭の庵) |
| 3. 八幡神社 (掛盤)   | 12. 八幡神社 (横谷)  | A. 黒瀧寺        |               |
| 4. 八幡神社 (木頭名)  | 13. 八幡神社 (杉ノ尾) | a. 地藏堂 (岩倉)   |               |
| 5. 八幡神社 (加持久保) | 14. 倭武神社 (出羽)  | b. 薬師堂 (川成)   |               |
| 6. 八幡神社 (坂州)   | 15. 八幡神社 (大用地) | c. 阿弥陀堂 (小島)  |               |
| 7. 神影神社        | 16. 神明神社       | d. 阿弥陀堂 (出羽)  |               |
| 8. 八幡神社 (高野)   | 17. 倭武神社 (坂州)  | e. 地藏堂 (阿津江)  |               |
| 9. 八幡神社 (当山)   | 18. 倭武神社 (高野)  | f. 虚空蔵堂 (木頭名) |               |

表1 神社建築調査一覧表

神社名	鎮座地	創建	祭神	旧社格	鳥居様式(材料)	農村舞台※1
1 宇奈為神社	木頭字内ノ瀬 1	不詳	豊玉彦命 豊玉姫命 玉依姫命	旧郷社	台輪(コンクリート) 昭和29年	木造6×3.5 入母屋造鉄板葺 葺帳有り
2 八幡神社	小島字平畑43	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社		木造4.5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳有り
3 八幡神社	掛盤字上榎 7	不詳	品陀和気命	旧村社	台輪(木造)	木造5×3 切妻造鉄板葺
4 八幡神社	木頭名字寺野 8	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	台輪(コンクリート)	木造5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳、太夫座有り
5 八幡神社	阿津江字加持久保 2	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	台輪(木造) 昭和54年	
6 八幡神社	坂州字広瀬32	不詳	品陀和気命 足仲彦命 息長帯姫命	旧村社	台輪(コンクリート) 昭和6年	木造6×3 寄棟造茅葺鉄板葺 葺帳、太夫座有り 国指定 重要民俗文化財
7 神影神社	沢谷字谷屋敷 1	不詳	安徳天皇 (相殿) 須佐之男命 草薙劍	旧村社	明神(コンクリート)	木造3×2 切妻造鉄板葺
8 八幡神社	寺内字寺内 2	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	台輪(木造)	木造5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳有り
9 八幡神社	当山字梅ノ久保 1	不詳	品陀和気命 足仲彦命 息長帯姫命	旧村社	台輪(木造)	木造5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳、太夫座有り
10 八幡神社	岩倉	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	両部(木造) 平成2年	木造4×2.5 切妻造鉄板葺
11 八幡神社	川成	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	両部(木造)	木造3.5×2 切妻造鉄板葺 葺帳有り
12 八幡神社	横谷	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社		木造3.5×2 切妻造鉄板葺
13 八幡神社	沢谷(杉ノ尾)	不詳	品陀和気命 息長帯姫 大雀命	旧村社	台輪(木造)	木造4.5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳、太夫座有り
14 倭武神社	出羽	不詳	日本武命	旧村社	台輪(コンクリート)	木造5×2.5 切妻造鉄板葺 葺帳、太夫座有り
15 八幡神社	大用地	不詳	品陀和気命 息長帯姫命 大雀命	旧村社	台輪(木造)	木造5×2.5 片入母屋造鉄板葺 葺帳有り
16 神明神社	阿津江	不詳	天照皇大神	旧村社	コンクリート 昭和36年	木造3.5×2.5 入母屋造鉄板葺 葺帳有り
17 倭武神社	坂州(宮の窪)	不詳	日本武尊	旧村社	明神(コンクリート)	
18 倭武神社	高野	不詳	日本武尊	旧村社		
19 天神社	出羽(棚平)	不詳			台輪(木造)	
20 雲早神社	沢谷	不詳			明神(木造)	

※1 舞台の規模は桁行×梁間で表す

表2 寺院建築・御堂建築調査一覧表

寺院名	所在地	開基	宗派	本尊	建物名 屋根形式 屋根材 建築年代
A 黒瀧寺	阿津江黒滝山 5	延暦12年 ※1	高野山真言宗	十一面観世 音菩薩	本堂 木造 寄棟造 銅板葺 享保元年(1716) 再建※1
a 地藏堂	岩倉	不詳		地藏菩薩	堂 木造 宝形造 銅板葺 平成11年再建
b 薬師堂	川成	不詳		薬師如来	堂 木造 宝形造 銅板葺
c 阿弥陀堂	小島	不詳		阿弥陀如来	堂 木造 宝形造 鉄板葺 四方出桁造
d 阿弥陀堂	出羽	不詳		阿弥陀如来	堂 木造 方形造 鉄板葺 安永2年(1855) 再建
e 地藏堂	阿津江	不詳		地藏菩薩	堂 木造 切妻造 鉄板葺
f 虚空蔵堂	木頭名	不詳		虚空蔵菩薩	堂 木造 宝形造 鉄板葺
g 観音堂	掛盤五倍木	不詳		聖観音	堂 木造 宝形造 鉄板葺
h 長福寺(木頭の庵)	木頭	不詳		阿弥陀如来	堂 木造 宝形造 鉄板葺

※1 『木沢村誌』(1976)

平成16年10月末日現在

本殿 建築様式	拝殿 建築様式 向拝	特記事項	A	B
宇那為神社 木造一間社流造 鉄板葺 熊野那智宮 木造一間社流造 鉄板葺 熊野本宮 木造一間社流造 銅板葺 熊野新宮 木造一間社流造 鉄板葺 八社宮 木造二間社流造 (見世棚造) 鉄板葺 鎮守社 木造一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 本瓦葺 向拝：大唐破風 本瓦葺	棟札22枚 最古のものは元禄7年 (1694) 現在の建物は安政3年 (1856)	○	○
木造一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 鉄板葺 向拝：切妻造 鉄板葺	棟札5枚 最古のものは文久2年 (1862) 阿弥陀堂	○	
木造一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 鉄板葺		○	○
木造一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝：入母屋造 銅板葺		○	
木造一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 鉄板葺		○	
木造一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 棧瓦葺 向拝：入母屋造 棧瓦葺	棟札23枚 最古のものは延宝5年 (1677) 現在の建物は弘化3年 (1846)	○	
木造一間社流造 銅板葺	木造 片入母屋造 鉄板葺		○	
木造一間社流造 鉄板葺	木造 入母屋造 鉄板葺		○	
木造一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 鉄板葺		○	
木造一間社流造 鉄板葺 折れ屋根	木造 入母屋造 鉄板葺	棟札13枚 最古のものは元禄元年 (1688) 現在の建物は昭和49年		
木造二間社流造 (見世棚造) 銅板葺 折れ屋根	木造 切妻造 鉄板葺			
木造一間社流造 銅板葺			○	
木造一間社流造 銅板葺	木造 片入母屋造 鉄板葺		○	
木造一間社神明造 鉄板葺	木造 入母屋造 鉄板葺	棟札5枚 最古のものは安永2年 (1773) 阿弥陀堂 現在の建物は昭和18年		
木造一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 鉄板葺			
		約20年程前台風により本殿倒壊		
木造一間社流造 (見世棚造) 鉄板葺				
木造一間社流造 鉄板葺				
木造 小社殿		棟札1枚 明治23年 (1890)		
木造 小社殿				

A：板脇障子 B：八方向に延びる組物

平成16年10月末日現在

建物名 屋根形式 屋根材 建築年代	特記事項
大師堂 木造 宝形造 銅板葺 明治25年 (1892) 再建※1 方丈 木造 入母屋造 銅板葺 昭和31年改築※1	平成6年本堂屋根銅板葺替 棟札4枚 最古のものは宝暦12年 (1762)

### 3. 木沢村の各社寺建築

#### 1) 八幡神社 (表1-6)

鎮座地—坂州字広瀬32

[本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺

身舎—<sup>えん ちゅう ちまき きれめ なげし うちのり かしら ぬき きばな</sup> 円柱 (粽) 切目長押 内法長押 頭貫木鼻  
<sup>こぶし だい わ ふたて さき おだる き つめぐみ なかぞなえ</sup> (拳) 台輪 二手先 (尾垂木付) 詰組 中備  
 彫刻 (正面：因幡の白兔) 彫刻板支輪 二軒  
 繁垂木

妻飾・<sup>にじゅう こう りょう</sup> 二重虹梁 中備彫刻 彫刻板支輪  
<sup>だい と つか で みつ と</sup> 大斗束 二段出三斗

向拝—<sup>きちようめん</sup> 角柱 (几帳面) 虹梁型頭貫木鼻 (獅子) 錫杖  
 彫

二段出三斗 (送斗付) 中備彫刻 手挟  
<sup>おくりと たばきみ</sup> 二軒繁垂木 三方切目縁 芻高欄 脇障子  
<sup>さんぽうきれめ えん はねこうらん わきしょうじ</sup> 木階五級 (木口) 昇擬宝珠高欄 浜床  
<sup>きざしごきゅう こぐち のぼりぎぼし はまゆか</sup>

千木—<sup>ちぎ</sup> 垂直切 3本 堅魚木—<sup>かつおぎ</sup> 3本

(図7~9)

この社は木沢村東南部、村役場のある坂州に鎮座する。「創建年代は不詳。もと八幡宮と称し、明治3年に現社号に改称、同5年村社となる。」と徳島県神社誌に記述がある。今回の調査において、この神社より23枚の棟札を確認し、建立年代や宮大工を確定することができた。棟札によると、この社は、弘化3年(1846)のもので今回調査した中では最も古い社であることがわかった。

本殿は一間社流造りで、青石基壇<sup>きだん</sup>に載る。身舎部分は円柱(粽)を切目長押と内法長押で固め、柱頭部には拳鼻付きの虹梁型頭貫、その上に台輪が載る。

身舎の組物は二手先で中央部に柱頭部と同様の組み物を置く詰組がある。これは、鎌倉時代の初期に発生した禅宗様に代表される様式のひとつである。



図7 本殿妻飾

妻飾は二重虹梁にさまざまな中備彫刻が施されその上に大斗束と二段に組んだ出三斗を立てる。(図7)

向拝部分は几帳面取の角柱を立て、虹梁型頭貫で固め獅子木鼻が付く。柱頭部は軒の出を深くするために二段出三斗に送斗の付く組物で構成され、身舎側へは手挟が取り付く。頭貫虹梁型木鼻の下面には錫杖彫りが施されている。軒は、二軒繁垂木である。

宮大工は棟札より湯浅岩蔵であることが確認された。その特徴として身舎正面の中備彫刻に氷を砕いたような岩の彫刻が見られる。虹梁や肘木に施された彫刻は簡素であるが、向拝から身舎にかけての中備彫刻には、建速須佐之男命の八岐大蛇退治や因幡の白兔、浦島太郎や閻魔と鬼などの昔話が施され、見る者を飽きさせない。三方切目縁に芻高欄を回し脇障子に取り付く。木階は五級の木口階段で、平成15年に改修され、木口は横長の長方形になっている。

また、境内には国指定重要有形民俗文化財の農村舞台(図9)が建ち、軒を深くするための出桁造り(せいがい造り)やこき柱を用いた落とし込み工法を見ることができる。村内の農村舞台では唯一秋祭りにおいて人形浄瑠璃や素人芝居が催されている。

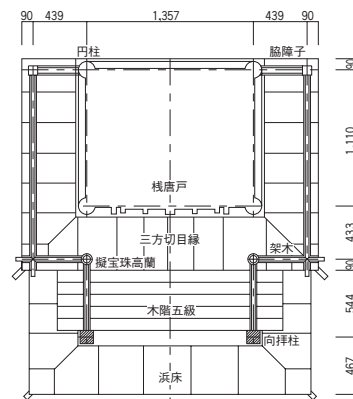


図8 本殿平面図



図9 農村舞台

## 2) 宇奈為神社 (表1-1)

鎮座地—木頭字内ノ瀬一番地

この社は木沢村役場の北方、那賀川沿いの一角に鎮座する。創立年代や由緒は不詳であるが、延喜式内社であり平安時代にはすでに成立していた古社である。木頭地域の氏神であり、豊玉彦命・豊玉姫命・玉依姫命を祭神とする。後の鎌倉時代後期に熊野十二社権現を勧請し、当本殿の周辺に熊野本宮・熊野新宮・熊野那智宮・八社宮が鎮守社と共に祀られた。それらの他にも、多くの末社や御輿庫・農村舞台が建つ。当社は、天正10年(1582)長曾我部元親の兵火と嘉永年間に、二度に渡り焼失している。現在の社殿は拝殿や小祠・舞台・御輿庫・拝殿を除いて、安政3年(1856)大工・湯浅岩蔵によって建立された。岩蔵の手による本殿等建築は、那賀川流域の地域特徴ともなり、現存する寺社建築は他地域のものも含めて、多くの共通点を持つ秀逸なものである。社殿に納められた22枚の棟札でも確認できたことは今回の収穫であった。また岩蔵の建立した五つの社殿も、それぞれの特徴を造り出しており、匠の技と遊びを見ることが出来る。

[宇奈為神社・本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺 身舎—円柱 切目長押 内法長押 台輪 (木鼻) 頭貫木鼻 (拳) 出三斗 二軒繁垂木 妻飾・虹梁 大瓶束笈型 開閉装置・棧唐戸 向拝—角柱 木鼻 (象) 連三斗 手挟 三方切目縁 脇障子 浜床 木階三級 (木口)

千木—なし 堅魚木—なし

[熊野本宮・本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺 身舎—円柱 (粽) 切目長押 内法長押 頭貫木鼻 (獅子) 三手先 (八方) 二軒繁垂木 妻飾・二重虹梁 大瓶束笈型 中備彫刻 開閉装置・棧唐戸

向拝—角柱 (几帳面) 虹梁型頭貫木鼻 (獅子) 錫杖彫 出三斗 (皿斗付) 繫海老虹梁 手挟 三方切目縁 刎高欄 脇障子 浜床 木階五級 (木口) 中備彫刻 腰組・二手先

千木—なし 堅魚木—なし

[熊野新宮・本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺 身舎—円柱 (粽) 切目長押 内法長押 頭貫木鼻 (拳) 台輪 (木鼻) 出三斗 二軒繁垂木 妻

飾・虹梁 大瓶束笈型 開閉装置・棧唐戸

向拝—角柱 (角面) 虹梁型頭貫木鼻 (象) 錫杖彫 二段出三斗 (皿斗付) 三方切目縁 脇障子 木階三級 (木口) 浜床 中備彫刻 繫海老虹梁 千木—なし 堅魚木—なし

[熊野那智宮・本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺 身舎—円柱 (粽) 地長押 内法長押 台輪 (木鼻) 頭貫木鼻 (拳) 出三斗 二軒繁垂木 妻飾・虹梁 大瓶束笈型 開閉装置・棧唐戸

向拝—角柱 (几帳面) 虹梁型頭貫木鼻 (象) 錫杖彫 二段連三斗 出三斗 三方切目縁 脇障子 浜床 木階三級 (木口) 中備彫刻 繫海老虹梁

千木—なし 堅魚木—なし

[八社宮・本殿] 木造 二間社流造 (見世棚造) 折屋根 鉄板葺

身舎—円柱 (粽) 切目長押 内法長押 台輪 (木鼻) 頭貫木鼻 (拳) 出三斗 板軒 妻飾・虹梁 大瓶束 開閉装置・棧唐戸

向拝—角柱 (几帳面) 虹梁型頭貫木鼻 (象) 出三斗 見世棚 繫海老虹梁

千木—なし 堅魚木—なし

[農村舞台] 木造 桁行六間 梁間三間半 一重入母屋造 波トタン葺 (元寄棟造茅葺) 出桁 (セガイ) 造 実肘木付大斗 二軒 疎垂木 蓐帳付 (一枚) (図10~15)

最も高い位置に鎮座するのが宇奈為神社本殿で、切石基壇の上に建つ、小規模で簡素に造られた一間社流造である。明治31年に屋根の葺き替え、大正4年には垂鉛鉄板に葺き替えが行われた。身舎は、円柱を切目と内法長押で回し、柱頭部を頭貫と台輪 (共に木鼻付) を載せて、出三斗を組んで丸桁以下屋根を受けている。妻飾りは、虹梁に大瓶束を立てて、笈型は幕末らしく雲模様の彫刻を隙間なく入れている。向拝の柱頭部は頭貫を通さず、内外に木鼻を付けてその上部に出三斗を置いて丸桁を載せる。虹梁型頭貫と外側の木鼻 (象) の頭部に乗る送斗、切目縁の高欄などを省略するなど、簡素に仕上げるのもこの社の特徴である。

熊野本宮本殿 (図11) は拝殿の後方に位置し、大工・湯浅岩蔵の代表作とされる一間社流造の社殿で

ある。宇奈為神社本殿同様、二度の罹災後の江戸末期の安政3年（1856）に再建された。その後明治13年に大修理、同31年に屋根の葺き替え、大正4年に屋根を亜鉛鉄板に葺き替えられ、数度の修理が繰り返された。身舎は粽柱に切目と内法長押を回し、柱頭部には頭貫（獅子）と台輪を載せて八方に組まれた三手先を受ける。柱筋から直角方向と外側に組み物を出し、詰組にするのが本来の姿であるが、あえて詰組とせず、四方八方に組物を出すことによって重厚さを演出している。この手法は和歌山県の社寺建築に採用されており、他の地方では見られない手法である。県内においても那賀川流域のみに多く見られる。上部に組物が拡がり、柱間を中備彫刻が詰め込まれ、岩蔵独特の賑わしさを見せる。さらにその上部の妻飾りには、二重虹梁と大瓶束笈型など、壁の隅々まで彫刻が施される。（図13）向拝は、角面柱の柱頭部に虹梁型頭貫を渡し、端部に象木鼻と柱間に中備彫刻を詰め、組物は出三斗（皿斗付）に連斗を置いて二段に組む。木階は木口の五級、三方に回した切目縁には唯一刎高欄が付く。高欄の腰組も尾垂木と木鼻を施した二手先としている。繋ぎは、手挟と海老虹梁を併用するなど、阿南や那賀川流域

に現存する岩蔵を象徴する社殿でもある。

熊野新宮本殿（図12）は、本宮本殿の東側に位置する。向拝柱頭部に虹梁型頭貫を通してのこと、頭貫上部の柱間や木鼻の先端に鬼の彫刻などを多様していること、向拝との繋ぎに海老虹梁を付けていること、柱頭部に皿斗を挟むなどに、若干の変化を持たせている以外は、組物や諸様式を含めて宇奈為神社本殿同様に簡素に仕上げる。また台輪留とせず木鼻を向拝方向に延ばしたために、繋海老虹梁に台輪の先端が喰い込む無理な収まりとなっている。

熊野那智宮本殿（図14）は、宇奈為神社本殿の下方、熊野本宮の西側に位置し、組物や諸様式などは熊野新宮に酷似する。相違点は身舎が一回り小振りであること、向拝柱頭部に皿斗を使用しないこと、同所組物が連斗を用いていることなどである。中備彫刻がおとなしく仕上げた分、獅子の木鼻を入れて相殺してバランスを保っている。明治13年に大修理、同31年に屋根の葺き替え、大正4年に屋根を亜鉛鉄板に葺き替えた記録が残る。

八社宮（図15）は熊野新宮の東隣に位置する。この本殿は身舎正面の柱間が二間あることから二間社流造と呼ばれ稀少で、以下のような多くの特徴を持

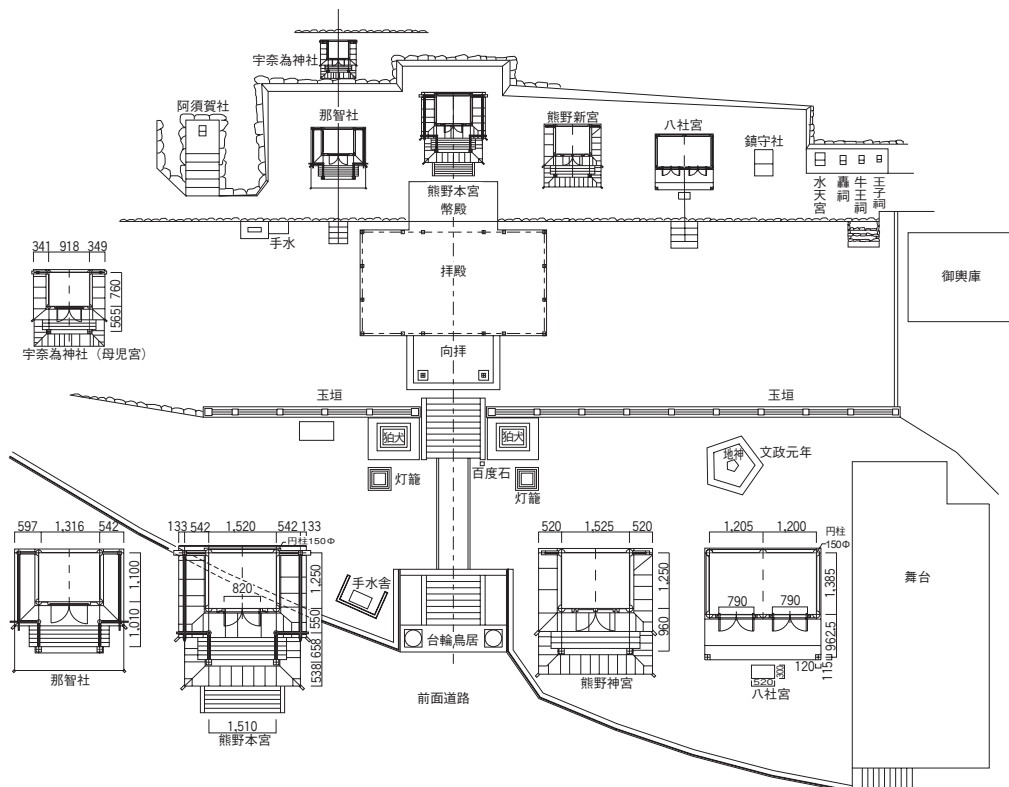


図10 配置、平面図



つ。屋根をなだらかな曲線とせず折屋根とすること、木階を付けずに見世棚としていること、三方に切目縁を設けないこと、中央の向拝柱を省略して広一間としていること、軒裏を垂木を打たず板軒いたのきとしていること、他の社殿のように彫刻を使用せず簡素に仕上げることなどがあげられる。この本殿も明治・大正期に3度、屋根修繕などの維持工事が行われている。全国的にみて一間社が一番多く、次いで三間社・五間社・四間社・二間社と続く。それ以外には七間社・八間社などがあり、山梨県の窪八幡神社本殿くぼの十一間社流造が最大となる。県内では三間社が最大で各地域に多く分布する。一・三間社は平安時代に成立するが、それ以外は室町時代の初期から見え始める。

農村舞台は境内の南東の隅に西面して建つ。平入、入母屋造、桁行六間、梁間三間半の大規模な舞台である。上手鴨居(虹梁)に太夫座等の痕跡はないが、正面雨戸の下部には、この地方独特の一枚蓐帳を備える。建立当初は茅葺きの堂々としたものであったが昭和32年に屋根を下ろして現在のトタン葺きとした。建立年代は棟札等もなく不明であるが、時代相を表すものとして出桁を受ける持出梁や先端に架かる組物(大斗実肘木)がある。持出梁の先端は象鼻を造り出し、梁側面には若葉が彫られる。若葉の彫りや木鼻は宇奈為神社本殿向拝の木鼻に、実肘木は那智大社身舎の実肘木に酷似する。よって舞台の造営も岩蔵等による可能性もあり、社殿造営と同時期のものと推察できる。

以上が湯浅岩蔵等によるものであり、それ以外の

ものは八社宮の東に、鎮守社・水天宮・轟社・牛王祠・王子祠が、那智社宮の西側に阿須賀社を祭る。それらは小社殿(見世棚造)であり、すべてが流造の形態で造られている。拝殿は桁行4間、梁間3間の入母屋造、正面中央に大唐破風おおからはふの一間向拝を付ける標準規模の建物で、屋根は棧瓦で葺かれている。昭和7年に建立、同37・44・48年の3回ほど屋根や内部の改造の記録が残る。48年の屋根修繕時にすべての瓦が銅線によって固定され、急勾配の屋根瓦が頑丈となった。

境内の石造物は、コンクリート製の台輪鳥居が昭和29年。砂岩製の狛犬こまぬも新しく昭和3年。灯笼は天保3年(1832)と明治41年があり共に砂岩製。階段は御影石製で明治12年に造営された。手水は二基あり、古いものは砂岩製のものが拝殿横にあるが年代等不詳、新しいものは昭和61年に奉納された。百度石は大正8年で、石造物では江戸時代後期まで遡るものはなかった。



図13 熊野本宮本殿妻飾り



図11 熊野本宮本殿



図12 熊野新宮本殿



図14 熊野那智宮本殿



図15 八社宮本殿

### 3) 黒瀧寺 (表2-A)

所在地—阿津江黒瀧山5

宗派—高野山真言宗

本尊—十一面観世音菩薩

本堂 木造 桁行三間 梁間三間 寄棟造 銅板葺  
角柱 (角面取) 切目長押 内法長押 二軒疎  
垂木 出三斗 纂股

向拝—一間 縋破風 手挟 虹梁型頭貫木鼻 (獅子)  
錫杖彫 纂股

大師堂 木造 桁行三間 梁間二間 宝形造 銅板葺  
(図16~17)

黒瀧寺は黒瀧山の山頂付近に位置する村内唯一のお寺で、延暦12年の開基と伝えられている。

本堂は『木沢村誌』(1976)によると享保元年(1716)の再建で、桁行三間、梁間三間の寄棟造で四方に切目縁を回している。角柱を切目長押、内法長押で固め、柱頭部には頭貫と台輪が載り、その上に出三斗を置き軒を受ける。平成6年には屋根の銅板葺替えをしており、その時に垂木、野地板などの下地も取り替えている。近くに桁行三間、梁間二間の宝形造の大師堂があり、明治25年(1892)に再建されている。

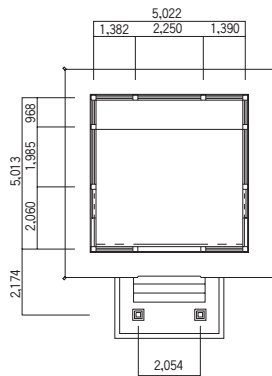


図16 平面図



図17 本堂全景

### 4) 長福寺 (木頭の庵) (表2-h)

所在地—木頭

宗派—真言宗

本尊—阿弥陀如来

木造 桁行三間 梁間二間 宝形造 茅葺鉄板覆  
角柱 (角面取) 切目長押 内法長押 二軒疎  
垂木 出三斗 纂股 間斗束

向拝—一間 縋破風 手挟 虹梁型頭貫木鼻 (象)  
錫杖彫 (図18~19)

このお庵は坂州木頭川東岸の西斜面に建ち、桁行三間梁間二間の宝形造りで、屋根は茅葺きであるが、現在は鉄板で覆っている。様式は角柱を切目長押、内法長押で固め、柱頭部には頭貫と台輪、出三斗が載り、柱間に間斗束を置く。正面には虹梁型飛貫を通して正面性を持たせている。軒は二軒疎垂木で、切目縁を四方に回す阿弥陀堂建築を取っている。向拝は一間の縋破風で、角柱 (几帳面取) の柱頭部を虹梁型頭貫が通り、先端には像の木鼻が付く。その上に出三斗が載り、主屋とは手挟で繋ぐ。内陣の柱間にある纂股の波のような形状に特徴があり、様式から判断する限り、江戸後期の再建と考えられる。

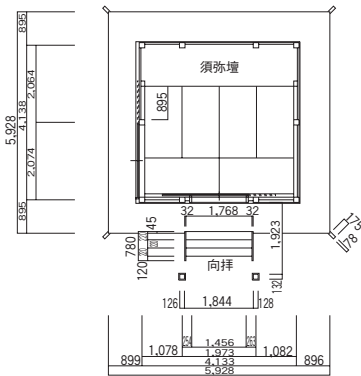


図18 平面図



図19 全景



#### 4. 棟札

棟札は、建築年代の確定や、工事に関わった人物、また、建替えや修繕などの回数を知ることができる貴重な資料である。今回の調査においては、9ヶ所73枚の棟札を調査することができた。

調査場所と枚数及び最古のものは、以下の通りである。

八幡神社（坂州）	23枚	延宝5年（1677）
宇奈為神社	22枚	元禄7年（1694）
八幡神社（岩倉）	13枚	元禄元年（1688）
地藏堂（岩倉）	4枚	宝暦12年（1762）
小島の舞台	2枚	明治31年（1898）
阿弥陀堂（小島）	3枚	文久2年（1862）
倭武神社（出羽）	4枚	昭和15年（1940）
阿弥陀堂（出羽）	1枚	安永2年（1773）
天神社（翺平）	1枚	明治23年（1890）

一番多くの棟札を所蔵していたのは、坂州の八幡神社の23枚で、年代が確実な最古のものは、これも坂州の八幡神社の延宝5年（1677）であった。（図20）

寸法では、最大は宇奈為神社の昭和55年（1980）の総高1060mmのもので、最小は、小島の阿弥陀堂の文久2年（1862）の総高380mmのものであった。年代による寸法の特徴は見受けられないが、社殿の規模によって寸法が異なる傾向があり、大きい社殿は大きく、小社殿は小さくなる傾向があり、同じ神社内に数棟の社がある場合、重要な建物ほど大きくなる傾向があり、建設に関わる地域の役員、大工など棟札に記名する数も増え大きな棟札になると考えられる。また、どの建物も工事の種類が同じであれば、ほぼ同寸であり、前例に倣っている。寺社建築の棟



図20 八幡神社（坂州）の棟札

札は、棟木に取り付けず、神殿の中や厨子などに納められるので寸法的に制限されることがある。

形状では、上部が山型になった尖頭型がほとんどであったが、少数、水平となっている平頭型が見られた。下部の隅を切り落とした鬼門切きもんぎりを施されたものは全体に他の町村に比較し少なかった。

棟札に書かれた人物では、江戸時代のものには藤原系を名乗る大工の多く、地元の大工の名前も多く見られるが、現在の阿南市の大工も見られた。

木沢の大工では、那賀川流域の多くの寺社建築に携わった湯浅岩蔵が名匠として知られている。湯浅岩蔵は、町誌によると文久2年（1862）5月20日79歳で亡くなっており、坂州の八幡神社63歳、宇奈為神社74歳の作品である。湯浅岩蔵の小工に高田慶太郎があり、高田慶太郎が棟梁となった小工に川尻良蔵とその技術が伝えられている。その後の伝承は資料が少なく不明である。宇奈為神社では那賀川流域に多く見られる四方八方に手先が出る組物や氷状に角ばった荒々しい岩の彫刻が見られる、これらの特徴を持ったものが湯浅岩蔵系統の大工の手によるものであることの判断材料となることが分かった。しかし、全てのものがこの様式で造られていないので、さらに研究を要するところである。

#### 5. おわりに

平成16年台風10号の豪雨による災害のために、今回調査できなかった社寺建築もあったが、調査できた社寺の中には当山の八幡神社本殿のように台風によって多大な被害を受けているものもあった。

その後、黒瀧寺方丈の調査をする機会を得た。徳島市の濱出久氏により設計がされ、旧来の和小屋ではなく洋小屋であった。

本稿では、建築年代を表す上で、江戸時代の年代区分は、建築的な特徴から前期を1615～1660年、中期を1661～1750年、後期を1751～1829年、末期を1830～1867年に区分した。

最後に、今回の調査において、多くの村民の方々に調査協力を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 文 献

- 木沢村誌編集委員会（1976）：『木沢村誌』木沢村。
- 徳島県神社庁教化委員会（1981）：『徳島県神社誌』徳島県神社庁。
- 奈良国立文化財研究所（1990）：『徳島県の近世社寺建築（近世社寺建築緊急調査報告書）』徳島県教育委員会。
- 阿波のお堂の習俗研究会（1988）：『阿波のお堂』徳島県出版文化協会。
- （社）徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会（1997）：『阿波の社寺建築』阿波のまちなみ研究会。
- （社）徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会（1992）：『阿波の農村舞台』阿波のまちなみ研究会。